



道草日記③／大野八生 2
 作者が語る「14ひきのシリーズ」③／いわむらかずお 3
 「違い」を豊かさにつなげるインクルーシブ保育／大庭正宏 4
 とりあえず……楽しんでみる?!／横山だいすけ 6
 旅にはふしぎがいっぱい／川辺陽子 7
 イラスト／さとうあや

『ピースケのいえで』をめぐって

たかどのほうこ

30年以上も前のこと。素敵な幼児絵本を何冊も描かれた作家の方から直接聞いたという言葉、ある編集者が教えてくれた。「自分の子どもをモデルにしたお話が作れるようになったのは、その子が大人になってからで、リアルタイムではできなかったんですって」と。

それからほどなく、私は女の子の母親になり、そのまま描写するだけで楽しいお話になりそうな光景にたくさん出会った。けれどもつたいないことに、なぜかそういう気分にならず、目の前にいる娘とほとんど関係のないところで書きつけてきたのだった。件の言葉を思い出しては、(深く考えることもなく) まあそういうものなんだろう、なんて納得しながら。

一昨年「日本児童文学」*から絵話の依頼をいただいたとき、ふと、娘とよく遊んでいた女の子のことが頭をよぎった。同じマンションにいたその子は、プイプイと元気いっぱいであまぐれで、娘は時どき振り回されながら、階段を上ったり下ったりと、一時期を共に過ごしたのだ。ぬいぐるみを連れて上り下りすることもあった。その光景を振り返っているうちに、3見開きのささやかな作品が生まれたのだが、思えば娘もその子も、今では30歳を超えているのだった。そこに思い至った時、先の作家の言葉が再び浮かびあがり、ああ本当にそうだ……と、不思議な気持ちになったのだ。――遊んでいた子どもたちとそこにいた私。かつて遊んでいた子どもたちと、それを思い出している私。お話にしてみようという、ふとした意志は、なぜ後者の場合に生じたのだろう。その作家にしても、私にしても……。このことについて、そのうち静かに考えてみたい気がする。

さて、「日本児童文学」にお話が掲載された後、隅々までもっと読みたい、もっと見たいと童心社の永牟田さんが言って下さったことで、3見開きが1冊へと生まれ変わるようになったのだが、制作する段になると、冒険心がむくむくと頭をもたげてきた。女の子たちの世界、ぬいぐるみたちの世界、2つが溶け合った世界、これを、どこか懐かしく、明るく賑やかに、でもうるさくなくシックに表現できないものかしら……。

こうして、なかなか厄介な、しかも刷り上がるまで結果がわからない色指定なる方法を思いきって用い(印刷屋さんにもずいぶん苦勞をおかけして)、『ピースケのいえで』ができあがった。開くと、遠く退った日々が蘇るのだが、今の子どもたちだって、きっとこんな感じだろうと思っている。

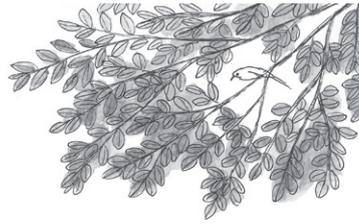
(児童文学作家)

*「日本児童文学」……日本児童文学者協会が編集、発行する児童文学総合誌。

道草日記 3

大野八生

(イラストレーター・造園家)



“花”カマキリ



道

端でカマキリを見つけると、つい自分の庭に連れてきてしまいます。カマキリがいると、葉を食べたてしまつ虫を食べてくれるからです。人間の勝手な言い分ですが。

毎年私の小さな庭では、どこかでスカウトされたカマキリたちが暮らしています。大きなカマキリ、小さなカマキリさまざまに。お互いが鉢合わせをしまつと、どちらかが食べられてしまつので、近くになりそうな時は、別の場所へ移します。

ある日、お客さまの庭の手入れにうかがう途中、電車の中で小さなころんとしたカマキリを発見！ ちよつと困っているかのように。「これはますい」もつていたビニール袋へそつと入れて庭へ。すぐに放つと嬉しそうに緑の中へ飛び込んで行きました。その庭は、夏から秋の終わりまで、白く香りの良い、シンジャーリリー（花生姜）がたくさん咲きます。庭へうかがつと小さなカマキリは、よくこの花のところに止まっていました。ちよつと花の大きさが自分の大きさと同じくらいで、隠れているのかわからないようでした。

晩秋の花も終わるころ、朝から夕方まで、彼が同じ花に止まっている姿を見つけました。体が少し白く見えて、おかしいなと思ひ触ってみると、もう動かなくなっていました。その庭で、小さなカマキリは、秋まで過ごしました。連れてきてしまい、幸せだっただろうか？ シンジャーの花のもとで動かなくなった彼は、白い花のようでした。

(おおのやよい)

作者が語る 「14ひきのシリーズ」3 いわむらかずお



14ひきのやまいも

いわむらかずお/さく
1984年7月刊行

森の秋は美りの秋。14ひき
たちはみんなで、やまいもほ
りにでかけます。



ほうちよう トントン、せんぎり トントン。おなベ クツクツ、むかご クツクツ。すりこぎ ゴリゴリ、だじじる いれて、とろろ ゴリゴリ。

第三作目の『14ひきのやまいも』は、『ひっこり』『あやこぼん』の翌年に出版されました。
『やまいも』は「14ひきのシリーズ」を構想し始めた初期段階から、描きたいと思っていたテーマでした。初めて山芋掘りをやった

「14ひきのやまいも」

のは、また東京の日野市にいたときでした。近所の農家の人に誘われてやってみたのですが、たちまち魅了されました。掘るのは大変だけれど、食べると本当においしい。播り鉢で播るとお餅のように粘り気があるのです。

14ひきたちは、大人の親指くらいの小さい野ねずみですから、みんなで力を合わせて掘り出します。土の力や山芋の力、植物と土の生命力を描こうと思いました。

私の父親が、戦後のまだ貧しい時代に、よく山芋を買ってきては、とろろ汁を作ってくれました。父が山芋を播るときに、私は播り鉢をおさえる係りをしていたのをよく憶えています。そんなこともあり、私も子どもの頃からとろろ汁が大好きでした。

無事に山芋を掘り終えた14ひきたちは、家族みんなで食事の準備をします。この場面の文章は、「ほうちよう トントン、せんぎり トントン。おなベ クツクツ、むかご クツクツ。すりこぎ ゴリゴリ、だじじる いれて、とろろ ゴリゴリ。」

画面からいろんな音が聞こえてくる。言葉がこの場面を豊かにしているんです。私の絵本作りでは、状況を説明する文章はできるだけ書かずに、音や気持ちを言葉で表現し、絵本をめぐるリズムや時間を生み出していきます。

「14ひきのシリーズ」は、画面下部に二行だけ文章を入れるようになっていきます。絵の一部を白くしてそこに文字を載せるということとはやりたくなかったのです。ブックデザインをしてきているアートディレクターの上條喬久さんのアイデアでもあり、絵を大事にするレイアウトですね。

(まとめ・編集部)

「違い」を豊かさにつなげるインクルーシブ保育

●「インクルーシブ保育」って何？

「インクルーシブ保育」という言葉を皆さんは知っていますか。障害児保育を支える重要な理念を表す言葉として保育現場ではずいぶん知られるようになってきました。ですが、その意味を正しく説明できる保育士が少ない現状を見ると一般的にはまだ耳慣れない言葉だと思えます。インクルーシブは「包摂的な、包み込んだ」という意味をもち、対義語であるエクスクルーシブは「排他的な、締め出す」という意味になります。ですので、インクルーシブ保育とは「障害の有無にかかわらず、すべての子どもを包み込む保育」という意味になります。単に「障害のある子ども」と「障害のない子ども」が同じクラスで保育を受けるだけでは「包み込む」ことにはなりません（このような保育を統合保育と言います）。

インクルーシブ保育とは、障害にかかわらず、子どもは一人ひとりが異なる特性をもつ存在であって、みんな違って当たり前という前提のもと、多様性を尊重し、発達を保障しながら、育ちあえる環境のもとで行う保育を意味します。皆さん



大庭正宏 (おおば・まさひろ)

社会福祉法人陽光福祉会理事長兼太陽の子保育園園長、白梅学園大学非常勤講師。
保育園にてインクルーシブ保育を行うとともに、児童発達支援事業所などでの活動を通じソーシャル・インクルージョンにも取り組んでいる。

んはこのような説明を聞いてどのように感じますか。「素晴らしい保育のように感じるけど、理想的過ぎて現実感がない」と思っ方もいらっしゃるかもしれません。私もはじめはそのように感じていました。もう十年以上前になりますが、統合保育に限界を感じていた私は、いろいろ調べていく中で「インクルーシブ保育」を知りました。当時はインクルーシブ保育についての情報があまり多くはない状況でしたが、得られる情報をできるだけ集めました。そして、学べば学べば、理想としてはわかるが、これを現場で実践するのは無理ではないかと感じていました。そのようなとき、福祉先進国であるフィンランドでインクルーシブ保育を実践している保育園を視察できる機会が得られ、迷わず参加しました。いくつかの保育園を見学すると、保育環境への工夫や保育士のスキルなど、参考になる点が多く盛りだくさんでした。そしてインクルーシブ保育を当たり前のように行っているという現実を、実際に感じる事ができたのが一番の収穫でした。帰りの飛行機の機内で視察を振り返りながら

「あとはやるだけ」と何度もつぶやいていたのを今でも覚えています。

●例えば、しんどかったら逃げてみる

私が理事長を務めている社会福祉法人陽光福祉会では、東京都羽村市にて二つの保育園と児童発達支援事業所の運営を行っています。インクルーシブ保育の実践を目指し、これまで試行錯誤を繰り返してきましたが、ようやくインクルーシブ保育が当たり前になってきたように感じます。当園で行っているインクルーシブ保育を簡潔に説明すると、「刺激が少なくわかりやすい環境で、子どもが見通しと余裕をもって生活できるよう配慮された保育」となります。これではわかりづらいと思いますので、「リソーススペース」と「イヤーマフ」を例にとっても少し具体的に説明したいと思います。

リソーススペースは一人で過ごせる場所、集団活動にしんどさを感じたときに逃げ込めるスペースです。大人でも集団に疲れて一人になりたいときがありまが、子どもも同じです。特に、特性が強い子どもはその疲れが人一倍強く出ます。そのため、しんどくなったらいつでも一人になれる場所があるというのは子どもの安心感につながります。過去に、パニックになると物を投げたり、保育士をつねる・ひっかくなどの行動が出る四歳児クラスの子もいました。この子ははじめ、担任に声もかけずにリソーススペースに行っていました。次第に「わざわざして嫌だから」「もう少しすると気持ちが爆発しそうだから」など、リソーススペースに行く理由や、「いただきますになったら呼んでください」など、戻るタイミングについても言えるようになってきました。それに合わせパニックになることも格段に減り、五歳児クラスになったころからリソーススペースに行く頻度が減り、後半はまったく利用しなくなりました。この子にとってリソーススペースの存在が「無理しなくていいんだ」という心のゆとりを作り出し、それにもない、考えたり言葉に出したりすることで自分の気持ちを理解することにつながっていったと考えられます。そして、この経験の繰り返しで心の成長につながったのだと思います。ちなみにこのリソーススペースは特性の有無に関係なく誰でも利用できます。実際、ふだん利用しない子どもがリソーススペースで遊んでいて、どうしたのかなと担任に聞いてみると、登園時に保護者の方と上手に離れられなかったとのこと、モワモワする気持ちをクールダウンさせようとしていたのですね。



(左) いつでも一人で過ごすことができるリソーススペース。

(下) 聴覚過敏をもつ子ども以外でも集中したいときにイヤーマフを使用している。



イヤーマフは音が出ないヘッドホンみたいなもので、周囲の不快感音を遮断する効果があります。もともとは、聴覚過敏をもつ子どものためにと思って各クラスに用意したのですが、今では聴覚過敏をもつ子ども以外でも、塗り絵や積み木などに集中して取り組みたいときに使

ていたりします。

●インクルーシブ保育が「つなぐ社会

インクルーシブ保育は、「障害のある子ども」が「障害のない子ども」の側に入るよう支援を行うことではありません。そもそも、発達障害で言えば、発達障害をもつ子どもと、そうでない子どもは明確に線引きができません。だからこそ、診断的な障害の有無だけに注目して支援を考へていくことは、少なくとも保育の現場ではあまり大きな意味をもたないと思います。それよりも、子どもたち一人ひとりの困り感に寄り添い、環境の調整や生活の流れを見直していく中で、みんなにとって生活しやすい環境を模索する取り組みが重要で、それがインクルーシブ保育へとつながります。はじめは、障害をもつ子どもへの特別な支援であっても、それを特別視しないで「みんな」への支援へと拡張していけば、子どもたちの生活はより穏やかで、豊かなものへと変わります。園は子どもたちにとって初めての社会です。その初めての社会がインクルーシブな環境であることは、互いの違いを認め合い、もつとみんなが生きやすくなり、豊かな社会を作り出す第一歩になると強く願って、日々保育を行っています。

ピーマン村の絵本 シリーズ最新作!

『やっぱりハロウィン』

「おかあさんといっしょ」(NHK・Eテレ)

11代目歌のお兄さんをつとめた

「だいすけおにいさん」こと横山だいすけさんが、

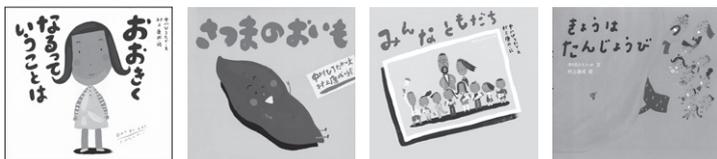
「ピーマン村のおともだち」シリーズ最新作

『やっぱりハロウィン』についてご寄稿くださいました。



やっぱりハロウィン

中川ひろたか／文 村上康成／絵
定価1430円(本体1300円+税10%)



ピーマン村の絵本 中川ひろたか／文 村上康成／絵

とりあえず……楽しんでみる?!

横山だいすけ

「ピーマン村の絵本」たちを読むと、自分の幼稚園時代を思い出します。お母さんみたいに心から向き合ってくれた担任の先生。いつも元気いっぱいかわいがってくれたお兄ちゃん先生に、副担任の先生。みんなでおっきな虹を見たお泊まり会。おいもほりやがんばった運動会のかけっこや旗ふり。三十数年前の記憶なのに、思いかえすとたくさん思い出がよみがえってきます。

「ピーマン村の絵本」はそんな思い出を思い返させてくれたり、その時に感じた子どもものの心がいっぱいつめこまれているような気がします。

きつと親子で読むと、子どもたちも楽しさや、ワクワクをお母さんやお父さんの「声」や「絵」から感じたりするのではないのでしょうか。

今回はハロウィン！ 子どもたちや園長先生の遊び心がたっぷりです。

子どもにとってハロウィンは変装したり、お菓子をもらえたり……ととても楽しみな一日。

でも園長先生はお仕事で乗り気ではありません。そこで子どもたちが園長先生にさまざまなイタズラをしかけるのですが……そこからの園長先生の行動もなかなかのものです。

大人になるとつつい仕事で、子どもの遊びに乗り気になれず、こついつたことあるある……と

思っています。でも子どものイタズラをきっかけに、本気になってハロウィンを一緒に楽しむ園長先生の姿に、ああこれって本来、大人の在るべき姿なのかなあと感じました。

やっぱり子どもって大人のすることをよく見ているものです。だからその子どもまわりにいるんなことを本気になってできる大人が多ければ、きつとその子どもなんでも本気になれることが当たり前になっていくのかな？なんて思います。

僕は子どもと歌がずっと大好きでNHK・Eテレ「おかあさんといっしょ」の歌のお兄さんになりました。「おかあさんといっしょ」を卒業した今、ファミリーミュージカルコンサート「世界迷作劇場」で全国をまわっています。

いちばん大切にしていることは「全力で楽しむ」。僕がどんな時も全力で楽しんでいると、観にくてくれる子どもたち、家族、大人のみなさんにもその「楽しさ」が伝わっていくのかなと思います。大人って「教えること」も大切ですけど、「一緒に楽しむこと」も同じくらい大切なことなのではないでしょうか。

ぜひ今回の『やっぱりハロウィン』も、読み手の「あなた」が全力で楽しみながら読み聞かせしてみてください！

きつといつもとは違った読み聞かせになるような気がします。

最後に……園長先生、中川さんに似てるなあ笑。

(よこやまだいすけ／歌手・俳優)

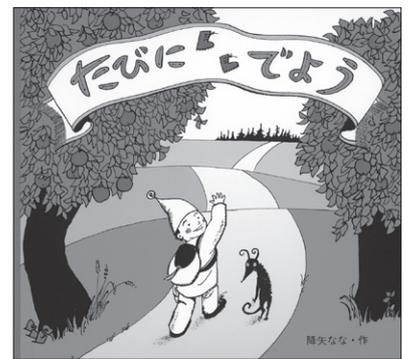
旅にはふしぎがいっぱい

川辺陽子

三角帽子をかぶった男の子が、見送りの人においさつをするように振り向いて右手を挙げています。そばにはやせた黒い犬が寄り添い、二人はまさにこれから旅にでるところ。旅にでるときの期待と下キドキを感じるような表紙が、この物語の始まりです。

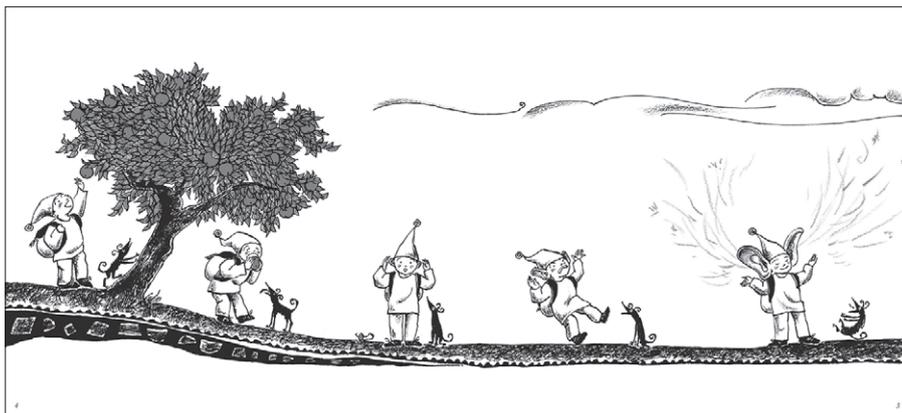
文章があるのは、最初と最後だけ。あとはずっと文字のない場面が続きます。男の子は道々、木になるりんごやしげみのいちご、屋台のシロップ、畑の大根など、いろいろなものを口にしては変身をくりかえしていきます。そして、夕飯に食べたあるもののせいでとんでもないことに……。

『たびにでよう』は一九九二年初版の、降矢ななさん十四冊目の作品でした。この絵本には、当時降矢さんがよく観ていたロシアや旧東欧諸国の短編アニメーションの影響がみられます。左から右へと描かれる男の子の旅の行程には連続性があり、読む人の中で一つの絵として自然につながって生き生きと動き始めます。それにもとない、登場人物の声だけでなくさまざまな五感を刺激する要素が感じられるのですから、これはまさに「物語を語る画家」といわれる降矢さんの本領が発揮されたものです。またこの作品には当時としては珍しい「手描き分版法」という高度な技術が用いられ、一見すると色鉛筆で描いたようにみえる温



『たびにでよう』

降矢ななさんがスロヴァキアへ旅立った年に生まれた名作があらたに改訂新版として発売になりました。



たびにでよう

降矢なな / 作
定価1430円(本体1300円+税10%)

ユニークな印刷方法! 手描き分版法

原画は、黒、黄、赤、青、それぞれのインク用に、4枚に分けて描かれています。



どんなふうに描いているのか見てみよう!

かい色彩が表現されています。そうした妥協のない創作姿勢にも、子どもたちに本物をみせたいという降矢さんの真摯な思いが表れているように感じられます。

また、一九八五年に『めっきらもっきらどおんどん』でデビューした降矢さんが、スロヴァキアへの留学を決めた中で制作出版した本作品には、「また見ぬ新しい世界への期待や不安、そして希望がこめられています」と、今回加わった降矢さんのあとがきに書かれています。この絵本の中で私がいちばんひかれるのは、主人公の連れ・黒犬の存在です。男の子がどんな姿に変身してもいつもかたわらにいて、ピンチのときには必ず助けてくれる——こんな素敵な相棒がいるからこそ、行く手に何が待っているかわからない冒険の旅にも、勇気をもって踏み出すことができるのです。

大人は文字情報に頼るがゆえに、絵で語られるストーリーを読むのが苦手です。文字なし絵本はどう読んでいいかわからないので、手を出しにくいと思う方もいることでしょう。そんなときはどうぞ、絵を読む達人の子どもに楽しみ方を教えてもらってください。子どもたちは描かれた物語をすみずみまで読み解き、男の子と犬の奇妙で愉快な冒険の旅を存分に楽しむはずですよ。

(かわへ あき) / 教文館ナルニア国

9月の新刊図書！

どうぶつしかけえほん

ふしぎな！ どうぶつパーク

いしかわこうじ／作・絵

定価1100円(本体1000円+税10%)



ふしぎな動物たちが大集合！ しかけをめくると動物たちが動き出すよ。動物の特徴や、すんでいる場所もひと目でわかります。

単行本絵本

ピースケのいえで

たかどのほうこ／作

定価1540円(本体1400円+税10%)



のぶちゃんのぬいぐるみのピースケが、なぜかみどちゃんの家に来た！ 何があったのか、ピースケがぬいぐるみたちに話し始めて……。

読者の声

童心社のおはなしえほん
まいごのモリーのおかいもの
こまつぶひさ／文
はたこうしろう／絵

定価1430円(本体1300円+税10%)



モリーの表情がかわいくて楽しく読みました。特にたこやきを食べているところや家族そろってシチューを食べ、持っている絵がいいなあと思いました。フニやカエルがよく動いているところもおもしろかったです。モリーの家はどんな家なんだろうな行ってみたいと思いました。次の作品ではフニが何になるのが楽しみです。
(神奈川県 K・Y 六歳)

松谷みよ子 あかちゃんの本
いないいないばあ

松谷みよ子／ぶん 瀬川康男／え
定価770円(本体700円+税10%)



一歳になった孫に、オモチャより本を読んであげようと購入しました。幼稚園に通う孫娘もきて、「これ、うちにもある。わたし、字が読めないけど、読んであげる」と大きな声で「いないいないばあ」というと、弟もじっと聞いていて、ほほえましい光景でした。家族がひとつになる時間です。
(東京都 T・A 七歳)

単行本図書

14ひきのアトリエから

いわむらかずお／文・画
定価1980円(本体1800円+税10%)



小学校の教員をしています。図書館のボスターで14ひきのシリーズが40周年を迎えたことを知り、さっそくいむらかずお絵本の丘美術館に行ってきました。あたたかく、一人ひとりへの愛がこめられた、自然いつぱいのこのシリーズが大好きでしたが、美術館に行くと、さらに大好きになりました。人間の魅力は、こういう温かさなんだろうなあと思う、じんわりと優しい気持ちになり家に帰りました。クラスの子どもたちや、お家の方にもいむらかずおさんのお話をしました。これからもお元気でいてください。
(群馬県 M・N 三八歳)



イラスト／さとうあや

2023年9月15日発行(毎月刊)
母のひろば 第712号
定価50円(年600円/送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話: 03(5976)4181
03(5976)4402(編集)
編集発行人: 橋口英二郎
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン: 坂本梓 ロゴ: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌と同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

●「紙芝居アカデミー 2023夏期講座」は、会場とオンライン合わせて約180名の受講者と共に、猛暑に負けぬ熱量で行われました。編集者による基礎講座、大学教授による保育と紙芝居の過去・現在・未来をつなぐ講義。受講者による実演が熱気に新鮮な風を送り、絵本・紙芝居作家による自作実演を交えた特別講義で終えた2日間。来年もやります。📌

●映画『バービー』を観ました。フェミニズム映画との触れ込みでしたが、それだけにとどまらず、私が私であることを肯定してくれる、誰もをエンパワメントする内容で、大変勇気づけられました。子どもに向けてものを作る立場としても、時代の変化に敏感で常に認識を更新し続けていきたいと改めて思いました。おすすめです。📌